2020年10月18日 佐土原教会礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書12章36b～43節
説教題：神からの栄誉

昨年末、私は、ガソリン・スタンドの中で事故に遭いました。以前も申し上げたのですが、警察の方を待っている間、不思議な経験をしました。フトした瞬間、魂がどこかに引き上げられて、そして私は神様の前に立っていました。神様の姿は見えませんでしたが、目の前に明るい光が見えました。しかし、神様の前に立っているということは自覚しました。その時、私は、足がすくみました。「神様の前に立つということは、こういうことか」と思いました。それがどれくらい続いたのか、一瞬のことだったのか、良く分からないのですが、意識が普通に戻った時、「あそこに向かって歩いて行くのだ」と思いました。教会にはご迷惑をおかけしましたが、私にとっては、貴重な経験でした。ラジオ牧師の羽鳥明先生は、夢の中で神の裁きの座につかれたそうです。自分の罪を示され、「もうダメだ」と思った時、遠くから「この男の罪は、私が十字架の上で全部始末しました」という声が聞こえて来た。「イエス様だ」と思った時に、目が覚めたと語っておられました。私達は誰も、やがて神様の裁きの前に立つ、そのことを頭のどこかに持って信仰生活をすることは、大切ではないでしょうか。

本日の個所は、イエスの公生涯をまとめる個所です。36 節に「イエスは、これらのことをお話しになると、立ち去って、彼らから身を隠された」(36)とあります。もう彼ら(民衆)を教えるために活動されることはないのです。イエス様の伝道の生涯がどのようにまとめられているのか。「新改訳聖書」のある版は、ここに「ユダヤ人の不信仰」という小見出しをつけています。イエス様のメッセージを受けて、人々はイエス様を喜んで信じたのではなかったのです。彼らの問題は何だったのか。私達は何が大切なのか、そのような観点で2つのことを申し上げます。

1：36～41節「神の前に遜ることの大切さ」

３7節「イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった…」(37)。ヨハネは、イエス様の「しるし/奇跡」について沢山記しています。人々は見たのです。それにも拘わらず、彼らは受け入れない。弟子達は「なぜなんだ」と思うのです。

十字架と復活の後、弟子達は「旧約聖書」の中にイエス様について沢山のことが預言されているのを見つけたはずです。中でも「イザヤ書」の預言、特に53章の預言には、目が開かれる思いだったでしょう。「彼が担ったのは私達の病、彼が負ったのは私達の痛みであった…私の僕は、多くの人々が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った」(イザヤ53:4,11 新共同訳)。「そうだったのだ、だからイエス様は、多くの人々の病と痛みを共有され、癒されたのだ。イエス様は、我々を神に受け入れられる者とするために、我々の罪を全部背負って十字架について下さったのだ」と確信したでしょう。その「イザヤ書」53章の1節にあるのが、今日の38節の「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また、主の御腕はだれに現れましたか」(38)という言葉です。「彼の言うことを信じる者が誰かいたか、彼に現された神の力を認めた者が誰がいたか…(いない)」ということが預言されていた。それだけでなく、「イザヤ書」6章には、40節の「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理

解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである」(40)の言葉があるのも見つけるのです。イザヤは、神の前に立つ経験をしました。その時、自分の醜さを示され、「聖なる神の前に自分は滅ぼされても当然の人間だ」というところに落ちるのです。でも神は、彼を取り扱い、もう一度立て上げて下さったのです。その時、彼は、自分と同じように罪を抱え、悩み、苦しんでいる同胞にも神の救いに与って欲しいと思うのです。神が言われました。「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう」(イザヤ 6:8)。イザヤは言いました。「ここに、私がおります。私を遣わして下さい」(イザヤ 6:8)。今日の 40 節は、その時、神が言われた言葉です。「お前が語れば語るほど、この民はますます頑なになって行って、悔い改め等出来ないような状態になるぞ。『いくら神の言葉を語ってもだめだ』と思うようになるぞ」。それは「神が人を頑なにして、信じさせないようにする」ということではなくて、「人々の頑なさがあまりにも激しいので、まるで神が頑なにしておられるとしか思えない状態になる」ということです。でもイザヤは出て行った。そのイザヤの時代の人々の状況と同じ状況を、イエス様の弟子達は、当時のユダヤ人の中に見て行くのです。そして「頑なな民がいつの時代にもいたし、今もそうなのだ」というところに、答えを見たのです。

しかしなぜ、彼らはイエス様を信じなかったのか。色々とありますが、重要なことは、神の前に自分という人間がいかに罪に塗れた人間か、その罪が、罪を認めようとしない頑なさが、神と自分との間に仕切りを造っていることを分かろうとしなかったことです。だから、罪の赦しを語られるイエス様の前に遜ることをしなかったし、むしろ憎んだのです。

私達は何を教えられるでしょうか。イザヤのように自分の汚れ、罪深さ、それを神の前に差し出し、それを赦して取り扱って下さる神様を心から見上げることの大切さではないでしょうか。私達が、本当に「私はこんな者です」という砕かれた思いで神の中に飛び込んで行く時—{星野富弘さんの詩があります。「私は傷を持っている、でも、その傷のところからあなたの優しさがしみてくる」(星野富弘)}—その欠けに働かれる、神の赦し、私達を立て上げて行かれる神の恵みの取り扱いが、始まるのです。

1 人の兄弟が牧師に言いました。「先生、私は家内の変わりようを見て、あのように変わりたいのです」。彼は、自分も信仰があるはずなのに、なぜ変えられないのかと思ったのです。特に、信仰を持ったばかりの奥さんの変わりようを見て、ますますその思いに迫られたのです。牧師は言いました。「あなたの奥さんは、こういう風に罪のお詫びをして、そしてイエス様を信じられたのです」。彼は言いました。「私はどうすれば良いでしょうか」。牧師は言いました。「一緒に罪の悔い改めをしましょう。そして主を見上げましょう」。牧師の招きに応じてその人は祈りました。「私はこういうことをして来ました。こんな存在でした。神様、どうぞ、私の罪を赦して下さい」。ひざまずくようにして祈った時、その表情に喜びがやって来たそうです。牧師は、幼子のように砕かれて、神を求める、その姿を見て、「神はこういう人を祝福してくださるのだ」と思ったというのです。

この個所についてある説教者は「憎しみ」ということを強調していました。「憎しみ」を持ち続けることと神を信じることは相容れない、と言うのです。「憎しみ」だけではない、私達は色々なものを持っています。しかし「神様、私はこんな者です」と、それを神様の前に差し出し、遜

って行く時、神は赦し、恩寵を流し込んで下さるのではないでしょうか。そして私達は、神との関係を祝福され、「神よ、この重荷を取り去って下さい、この困難を突破出来る力を与えて下さい」と祈り求めることが出来るのです。祈りが妨げられるような虚しさを覚える時にも「神様、私の魂を喜びで満たして下さい、慰めと励ましを与えて下さい」と祈ることが出来るのです。そこに恵みを持って臨まれる神の顧みを経験することが出来るのです。罪人であるという遜り、砕かれた魂、それが大切ではないでしょうか。

2：42～43 節「神に喜ばれることを求めることの大切さ」

人々は不信仰でしたが、それでも 42 節には「指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた」とあります。彼らは、信仰の良心に従ってイエス様の姿を見て、イエス様のメッセージを聞いて、そこに神的なものを感じたのです。しかし、宗教的な権力者であるパリサイ人は、イエスを信じる者があれば、会堂から追放すると決めていました。ユダヤ社会において、会堂から追放されるということは、「村八分」に遭うということでした。恐ろしいことだったと思います。信仰の良心では、イエス様を信じたい、しかしそれは、指導者としての地位も、何もかも失う覚悟をしなければならないことでした。今のままでいれば、神への敬虔も、学識も、人々の賞賛の的でした。それで彼らは「隠れ弟子」であろうとしたのです。心の中では、イエス様を受け入れ、しかしそれを外に表明することはしなかった。そうすると、大きなものを失うこともないし、信仰の良心も、ほどほどに守れたのです。しかし聖書は、「神の誉れよりも、人の誉れを愛した/神と共に立つよりも、人と共にいることを好んだ」と評価するのです。これは神の評価、永遠の評価ですから、この方が重大です。彼らは目先の報いのために、永遠の報いという大きなものを失ったということです。

話が大きくなりますが、私は杉原千畝という方のことを思いました。第二次大戦中、彼は、リオアニアでユダヤ人に 2000 通のビザを書いて、計 6000 人のユダヤ人を助けたのです。国からは「ビザを出すな」と命令されていた。でも彼は「あの人々を見捨てるわけにはいかなかった。でなければ私は神に背く」(杉原千畝)と言ってビザを出した。神の誉れを愛した模範ではないでしょうか。これはあまりに劇的な話ですが、しかし教えられます。つまり杉原さんは「神に喜んで頂くこと」を大切にしたのです。私達は、ともすると、人からの誉れ、人に良く思われようとすることに目が行って、神に喜んで頂くということが２の次になってしまうことがあるのではないでしょうか。感謝なことに、私達は、迫害の時代には生きていません。だから人に隠れてイエス様を信じなければならないということは、恐らくないと思います。それでも、神に喜んで頂くことを本当に大切にしているか、と問われると、考えさせられるのではないでしょうか。

何度もお話ししていることですが、森繁さんが佐渡島に行って、キリシタン塚という殉教の碑を見た時、彼は考えるのです。「私がこの時代に生きていたら、私もイエス様を否まないで殉教出来ただろうか、それとも、イエス様を否んで転んだだろうか」。そうしたら、彼は神の語りかけを聞くのです。「私は、お前をあの時代に生まれさせていない。今、この時代に生まれさせたのだ」。彼は思います。「そしたら不公平じゃないですか、あの頃の人は命をかけた、私は命をかけていない」。神様がこう言われました。「私に従って来るのは、あの時も今も同じだけ難しい、

私に信頼する人だけが出来るのだよ」。「神様に信頼する」、私達は神に喜んで頂けるほど、神様を信頼しているでしょうか。「憎しみ」のことを申し上げましたが、私達は、神に喜ばれないであろう、様々な醜い思いを手放しているでしょうか。あのアーミッシュの人々は、本気になって憎しみを乗り越え、赦しに生きようとした。本気になって神に喜ばれることを大切にしようとしました。私達は、イエス様が一緒に生きて下さる大切な１人ひとりです。神の宮です。だからこそ、神に喜ばれることを大切にしたいと願うのです。やがて、神様の前に立つ時が来ます。その時、神様が「よくやった」(マタイ 25:21)と言って下さいます。

最後に

今日、2 つのことを申し上げました。「神の前に遜ることの大切さ」「神に喜んで頂くことを求める大切さ」。神様に、私達の信仰生涯をまとめて「良い信仰者として生きた」という見出しをつけて頂けるなら、幸いです。